

# 茶の湯 文化学会 会報

第103号 / 2019年12月25日  
発行 茶の湯文化学会  
京都市左京区下鴨森本町15  
生産開発科学研究所内  
〒606-0805  
TEL 075-702-9270  
FAX 075-702-9314  
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp  
http://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/

## 第四十二回研究会 訪中報告 令和元年九月十七日～二十一日

### 大山さやか

今年には熊倉団長、中村修也副団  
長のもと七名の参加にて、浙江省  
普陀山、寧波、天台山を巡る旅と  
なった。

初日 午後上海空港で合流、バ  
スで寧波の沖にある舟山諸島へ移  
動。インフラ整備は猛烈な勢いで  
進んでいるようだ。全長三九kmの  
杭州湾大橋ができたおかげで杭州  
まで迂回せずにすむ。とはいえ、  
たつぷり四時間車窓を眺めてはう  
とうとすることを繰り返して、中国  
の広大さを実感する。夕暮れ時、  
黒い瓦葺きに白壁の家々が見えて  
きた。そろそろ舟山らしい。ライ  
トアップされた橋をいくつか渡  
り、朱家尖島のホテルに到着。  
二日目 快晴。快速船にて十分  
ほどで普陀山島に着く。一日約

二〇万人が入山するという。この  
島が観音霊場となるきっかけは十  
世紀、日本の僧慧萼えがによる。日本  
へ帰ろうと何度船出しても、この  
辺りで海中より現れた鉄の蓮には  
ばまれた。五台山で拝領した観音  
像を不肯去観音院として祀ってよ  
うやく帰国が叶ったという。

何う。文革時には全山の仏像、樹  
木が破壊され、再興されたのはこ  
こ二十年余り。島内あまたある寺  
院の僧は戒律を厳しく守って修  
行。中国四大霊場のひとつとして  
全土よりの信仰を集め、今日では  
政府要人もしばしば訪れる。指先  
で数珠の玉を一つ一つ送りつつ静  
かに話される住職の中国語は、何  
とも上品で心地よい。カップで頂



金色の南海観音像

いた普陀佛茶は、青々  
とした一芯二葉が底に  
数枝。雑味のないさわ  
やかさだ。この旅で最  
も魅かれた茶だった。  
要所をバスとロープ  
ウェイに乗り、数カ所  
の寺院を巡る。長江の  
支流が流れ込んで海は

濁っているが、寺院の壁は熟しすぎない柿の色、青空とのコントラストが美しい。どこもあふれかえる老若男女が線香の束を高く掲げて三方に拝し、仏像の前では五体倒置を繰り返していた。みなどのような願いを観音様に託しているのだろうか。

夕食は普陀山仏学院参学会館にて精進料理をいただく。果物、芋類が豊富に使われかなり満腹に。二万歩歩いたこの日の疲れも吹き飛んだ。

三日目 古来日本から中国への玄関口となった寧波に移動。道元が典座より戒められた土地かと思ひとしおだが、中心街は欧米有名ブランド、ファストフード店が軒を連ねる。大都市ならばもはやどの国も変わらぬ光景か。

寧波茶文化博物館で茶芸の見学と体験。各自の前にはポット、茶器一式と茶葉。茶杯は二つずつ置かれている。茶芸師さんより教えていただき白茶を淹れてみる。



寧波茶文化博物館で茶芸の見学と体験

「茶杯の一つはご自身で、もう一つは周りの方と交換して互いのお茶を楽しんで。」とのこと。人により、味も香りも随分変わる。先生が淹れられた二煎目を味見させていただく。刺激のあるすがすがしさとわずかな渋味。残念ながらこの要素は引き出せなかったが、三煎目の茶に出た甘みが記憶に残る。

午後天一閣見学。一五六一年明の国防長官範鉄が建てた中国最古の蔵書楼。防火を兼ねてそここ

に池や水路がある。「天一」は水を表す易の言葉だと友人がその場で検索した。前日、真新しい金ピカの仏像を飽きる程見てきた我々には、子々孫々、火はもとより文革の嵐からも蔵書が守られたことが実に奇跡的に感じられた。

三時にここを後にしていよいよ天台山に向かう。バスで二時間。ガイドから「左に見えるのが仏像工場だ」と言われ目を覚ます。普陀山はじめ各地の寺院へここから出荷される。道理でこれまで見た仏様たちが同じお顔をしていたわけだ。まもなく国清寺の前を通り宿へ着く。この辺りは

日本の里山と同じ風景だ。川の水は清く、稲穂を風が撫でる。宿の水路には錦鯉がゆつたりと泳いでいた。

四日目 国清寺朝勤に参加。今回の旅のクライマックスであり、朝に弱い私には最大の

難関である。上海で参加希望を問われた時は、九人全員が即座に拳手した。

四時起床。不思議と眠気もたるさも感じない。標高もあり夜明け前は肌寒い。数分山道を下り寺に入る。暗がりには雨花殿からの灯りがもれてきた。さらに進む。本尊釈迦牟尼の姿がまばゆい。半時間前から始まっている二百名近くの僧と信者の祈りのただ中に身を置く。鐘に太鼓、声明かと思われ素朴な響きが堂に満ちる。熱心な信者達の声を背中に受ける。真摯な祈りに水をさすようで身の置



国清寺の朝勤に向う

き場がない。しばらくして念仏らしきものを唱えつつ本殿を廻るこ  
ととなった。合掌していた手の印  
が変わる。「手はこう」とすれ違  
う女性信者がジェスチャーで教え  
てくれた。文殊菩薩や観音菩薩の  
前を通り過ぎる。歩くことでふと  
念仏が口をついて出た。南無シャ  
オツアイ。気後れは和らぎ、祈  
りの一部となって堂の内外を回

る。元の位置に戻ると次は五体倒  
置となった。クッションの数が足  
りず、目の前の女性は冷たい石の  
床に手のひらと膝をついては祈り  
続けた。邪魔にならぬよう柱の影  
に立ち尽くす我々に「南無阿弥陀  
仏」とことわって僧が横切られた。

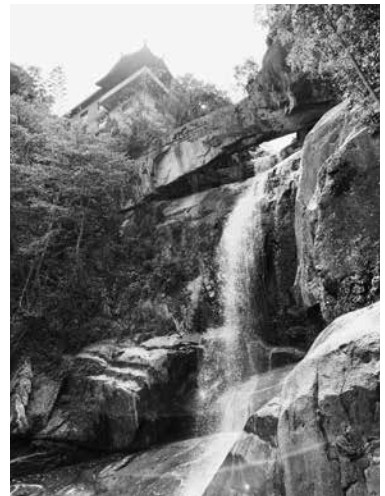
一時間ほどで朝勤は終了。本殿  
を出ると鳥がさえずり始め、宿に  
もどる一〇分で空は白々と明るく  
なった。さっきの念仏をガイドに  
尋ね書き留める。「南無消災延寿  
薬師仏」

朝食後改めて参拝。国清寺は、  
五九八年、天台宗の始祖智者大師

が亡くなった翌年に大師の構想通  
りに創建。その約百五十年後に訪  
れた最澄も、我々が見たと同じ、  
隋塔と呼ばれる石塔を目にしたは  
ずである。千四百年の樹齢をもつ  
隋梅は、文革中自然と枯れ、文革  
が終わると共に息を吹き返したそ  
うな。毎年実る小さな梅は一粒食  
せば一年寿命が伸びるらしい。

隋塔を望む方丈楼にて法師と交  
流。地元華頂峰産の紅茶をいただ  
く。現在この寺に僧は一三〇名。  
夕飯後の座禅の後この茶を飲まれ  
るとのこと。茶に関しての質問が  
続くことに法師は戸惑い気味に、  
福建省産の白茶も出して下さっ  
た。さし湯して、二、三時間語り  
合うには良いお茶だろうか。法師  
に感謝しつつ寺を後にする。

能の「石橋」のモデルとなった  
石梁飛瀑を訪れる。高さ数十mの  
滝の上に浸食によって見事に橋の  
形状となった巨石がある。それを  
結界として向こうには羅漢の聖  
地。幅は狭くても三〇cmぐらいか。



石梁飛瀑



智者塔院

るとすぐ脇に茶の木が  
植わっていた。所々収  
穫もされている。左手  
畔を隔て、遥かに見え  
る岩上で智者大師が教  
えを説いたという。日  
中画国の一三人がが一列  
になって道をたどって  
いると、現実の時空か  
らぼつかりと遊離して  
存在するかの不思議な  
感覚に襲われた。智者  
大師の廟所であるこの  
塔院に鑑真も幾度か身  
を寄せて、日本への船  
出を待ったという。鑑  
真と違い大師は中国内  
では知られておらず、

墓所を訪れる人もほとんどのな  
い。我々の足下に還った大師  
の身体があり、頭上には絶えない  
よう、たっぷりとした油に浮かん  
だ灯明があった。

滝に近づくだけでも足がすくむ。  
平常心の持ち主ならば難なく渡れ  
るだろうか。ここで成尋や栄西が  
羅漢に茶を献じた。この辺りは熊  
倉団長が四〇年前に訪れた当時と  
ほぼ変わらないと伺った。

昼食後、智者塔院へ。山道を入

慈溪へ移動。最後の夕食。感想  
を語り合い、食後は今回初参加の

お二人が用意して下さった、お茶とお菓子で、点出しの茶会となる。ホテルの従業員が数名興味津々にドアからのぞきこむ。その方達を誘い茶道で思いがけず日中交流となる楽しい夜だった。

最終日 上林湖越窯遺跡博物館を参観。上林湖周辺は古来良質な土が豊富で様々な青磁器が作られていたが、残念ながら現在では土はとりつくされていられない。我々の帰国を惜しむような雨中、上海へ向かい、それぞれの帰途についた。

## 理事会

令和二年度第二回理事会在、十月二十七日（日）午後一時より同志社大学 至誠館三階会議室において行われた。理事十三名が出席し、以下の議題について討議がなされた。

### 一、各担当理事より事業報告

二、令和二年度総会・大会について

三、会誌・会報について

四、会長辞任の際の対応について

て

五、その他

第一議題では、各担当理事より各地例会について、それぞれ報告が行われた。

第二議題では、令和二年度総会・大会について、東京国立博物館の茶室及び特別展の見学、東京芸術大学をお借りして総会・大会を行う案が出された。大会シンポジウムのテーマは、「岡倉天心と明治の茶の湯」とする。また、研究発表は四人とし、公募はホームページと会報で行い、エントリー締切りは二月四日（火）とすることが承認された。

第三議題では、会誌について山田委員長より、三十二号の報告がなされ、また三十三号の編集作業を進めていることや投稿原稿の応募状況などが報告された。ま

委員に推薦され決定した。

第五議題では総会・大会のお知らせポスターの廃止が提案され、承認された。

第三回理事会在は、令和二年二月十六日（日）同志社大学にて、開催することとなった。

## 例会

### 東京例会

（令和元年七月二十七日）

「近代数寄者の表装―佐竹本三十六歌仙絵」を中心に「濱村蘭衣子

掛軸の表装は、作品を成り立たせる重要な要素であるとともに、時代ごとの鑑賞のされ方、伝来といたった本紙からは知り得ない情報を伝える貴重な資料である。一方で研究対象とするには多くの困難が伴い、その重要性は認識されながらも体系的な研究がなされていない状況が続いていたが、近年は



表装をテーマとする展覧会、シンポジウムが開催されるなど研究状況は変化しつつある。

こうした現況にあつて、発表者は近代数寄者が手がけた表装に着目している。近代数寄者たちの伝統に捉われない革新性は、茶の湯の歴史、また美術史のなかでも特筆すべき活動と位置付けられている。彼らの嗜好や活躍した時代の特性は、その蒐集品の表装にも端的に表れていると考えられる。彼らが関わった表装は、他の時代のそれに比しても特徴をもち、支える美意識など考察すべき事象は多い。中でも「佐竹本三十六歌仙絵」各断簡は、表装を施した人物やその時期が判明する点、表装を巡る状況を伝える『大正茶道記』『東都茶道記』といった資料が残る点など、日本の表装史を考えるにあつても、近代数寄者の茶の湯の特質を考える上でも、極めて重要な対象と考える。今回取り上げた作品は、三十七の断簡のうち、益

田紅艶が所蔵した「坂上是則」(文化庁蔵)、土橋嘉兵衛の手に渡った「平兼盛」(MOA美術館蔵)、益田鈍翁が所蔵した「斎宮女御」の三幅である。当初の状態を多く留める「坂上是則」と「平兼盛」ある意図のもとに改変されたと考えられる「斎宮女御」の検証を通じて、佐竹本にみる表装の特質について考察した。結果、その特質として、茶の湯、茶会のあり方を新たにした近代数寄者たちの活動を反映し、本紙の内容と合致した表装が高い評価をうけるといった自らが属するコミュニティの評価を想定した上で為されたこと、広い空間で見比べられ、作品について語られ、考察される場で鑑賞されるがゆえの性格をもつこと、さらに近代数寄者たちの文化財への意識をも伺い知ることのできる重要な役割を担ったことを指摘し、近代数寄者による表装の特質の一端についての見解を提示した。

「茶の湯とトランジショナル様式」(明末清初の貿易陶磁を中心に―景德鎮窯と漳州窯) 砂澤祐子

トランジショナル様式(Transitional Period ware)とは、中国、明末清初期に欧米に向けて輸出された青花磁器、およびその作品の様式という。製品の特徴として、純白の素地に艶やかな釉薬がかかり、釉下の青料は鮮やかで、濃淡をつけたりぼかしを用いたりしている。日本には、徳川家康(一五四二―一六一六)遺愛の一对の徳利(青花人物図瓶)が徳川美術館に伝世する。同時代の日本向けの貿易陶磁としては、景德鎮窯産の「古染付」と「祥瑞」がある。

「古染付」と「祥瑞」は、日本の茶人の注文によって焼造されたと考えられている染付磁器のこと。「古染付」は全体に粗雑な作りで虫喰と称する口縁部の釉禿に特徴がある。「祥瑞」は、一部の作品に「五良大甫 呉祥瑞造」と

いう染付銘文があり、精緻な絵付けで、独特の細かな幾何学文や花鳥文を組み合わせた文様や鮮やかな発色に特徴がある。一方、「南京染付」という言葉があり、江戸時代までは「古染付」と「祥瑞」を含む明末清初の景德鎮窯産の陶磁器を意味し、まさに欧米のトランジショナル様式と同義であった。さらに「呉州手」と呼ぶ漳州窯系の青花も数多く日本に輸入されていた。こうした影響のもと肥前磁器が始まったと考えられている。

日本の茶陶との関係は、漳州窯系の三彩である「交趾」や華南三彩と日本の美濃焼の黄瀬戸・織部焼(総織部)との関連や、さらに美濃焼(志野焼)と、「祥瑞」や高麗茶碗の「御所丸」など、同時代におけるそれぞれの地域での器形などの類似性は、十六から十七世紀にかけての文化交流の結果とみなすことができる。

(令和元年九月七日)

「羽箒について4

―羽箒の使い方「羽箒は炭道具ではない!」―

下坂玉起

羽箒は、茶事(≡昔の茶会)では、炭点前以外でもよく使われる。迎付前、亭主は茶室を羽箒で掃き、その音で客は席入間近と知る。迎付の時、亭主が羽箒を持つ流派や、迎付後、亭主が茶室内の自分が歩いた跡を後ろ向きに掃き消す流派もある。亭主は席入前、茶道口の前を掃く。席入直前、茶道口の襖を掃き下ろす流派や、茶道口を開けるとまず手前の畳、茶道口の敷居や柱を掃く流派もある。中立時には座箒で茶室を掃く。濃茶や薄茶点前の時、羽箒で風炉釜や畳などを掃く流派もある。座箒を持つて客を見送る流派もある。

古田織部は、羽箒を棚に飾り始め、その置き合わせの配置で道具の甲乙を示した。当時の千家は織部が棚に飾ることを痛烈に批判し

たが、次の代では棚に飾っている。武家茶道系では、羽箒はまず釘に掛けないが、千家は羽箒を掛けるので必ず掛け緒があり、千家と武家茶道系の違いを表す歴史的痕跡になっている。

江岑は「常にふくさ・三ツ羽を傍らに置かれ『茶道筌蹄 後編開書』、如心齋は「羽箒と帛紗の事御教え」と記され、羽箒と帛紗は並記されている。

羽箒は、天界を飛ぶ神聖で清らかなものとされる鳥の羽を用い、「心の塵(迷い)をはらう」という禅の精神性からも、清め道具とされたのであろう。

羽箒は、炭道具ではなく、帛紗同様の「清め道具」なのである。

『長閨堂記』北野大茶湯記事の信憑性について

中村修也

奈良の春日大社の神人・久保権大輔利世が著したとされている『長閨堂記』には、北野大茶湯に

参加した権大輔が、その興奮に刺激されて茶の湯の途に入っていたことが記されており、また、具体的には北野大茶湯の実見史料として高い評価を得てきた。しかし、その内容を具に検討すると、多くの疑問点が見出される。まずは、北野大茶湯が開催された年を、天正十三年と誤っている。実際は天正十五年である。この誤りの原因は『太閤記』の記事を参考にして

書いているからである。また秀吉たちの囲いに入った客数を五人としているが、『兼見卿記』によれば八人である。また秀吉たちの茶の湯が「朝五」刻に終わったとあるが、これも『兼見卿記』によれば「午剋」である。このように『太閤記』を主材料とした『長閨堂記』には実際に参加した者とは思えない誤謬が多い。

さらに北野大茶湯の一番の冥加として挙げられている「一化」と「へちくわん」についても、問題がある。一化は松葉を燃やしたと

あるが、これはまわりに迷惑をかける行為である。美濃出身というのも、秀吉の一夜城が美濃に建てられたという伝説を補強するためのものとか考えられない。ノ貫についてもこれまでの極侘のイメージと違った、華やかな朱傘を利用しており、「手取り釜一つ」で食事茶の湯も済ませるイメージからは離れている。

このように検討が進むと、少なくとも『長閨堂記』が記す北野大茶湯の内容は事実とは異なり、実際に参加した人の記録とはみせない。そうして、大きく見れば、『長閨堂記』は久保権大輔に託した創作物であったのではないかと疑問も湧いてくる。

近畿例会

(令和元年九月十四日)

「径山寺台子伝来説にみる夢窓疎石の位置―茶式創始の由来―」

櫻本香織

径山寺台子伝来説とは、「台子」が中国径山寺より日本の各寺院に伝わり、茶の湯が始まったという創作話である。その初出は江戸元禄期であり、管見の限り十一の類話が確認できる。その代表は谷秦山（一六六三—一七一八）撰『俗説贅弁』の中に見られ、概略は以下の通りである。

「径山寺の虚堂智愚が南浦紹明に台子を贈り、崇福寺や大徳寺に伝わった。また天龍寺に渡り、夢窓疎石がその台子を使って点前をしたのが、茶式（茶の湯）の始めである」

発表者はこれまで概略の前半部である径山寺の虚堂智愚から南浦紹明に台子が伝承された話の背景について、その執筆者が茶人であるものと知識人であるものとの二つに分類し、渡唐天神説話の影響があったことを指摘した。渡唐天神説話とは、天神すなわち菅原道真、または円爾が径山寺の無準師範に参禅して法を嗣ぎ、その証

として袈裟や渡唐天神像を授かったという話である。（「径山寺台子伝来説の背景―茶の湯の「起源」をめぐる―」『多元文化』第八号 早稲田大学多元文化学会 二〇一九年二月）

本発表では、この続きとして、右記概略の後半部である天龍寺の夢窓疎石が台子を用いて茶式を始めたとする話（夢窓疎石茶式創始譚）の意図と背景について検討し、次の二点を指摘した。

① 創作を担った知識人の話には、茶の湯の創始に関して、「茶式」や「茶宴」という禅籍に見られる語を用い、夢窓疎石と関連づけることで、禅宗との関わりを示そうとする意図が窺われる。

② 天龍寺の夢窓疎石から台子点前の茶の湯が始まったという話は、とりわけ渡唐天神説話の類話の一つである『碧山日録』に見える話の構造と近似している。それは、渡唐天神像を描くことが夢窓疎石の直弟子休翁普観の蔵光庵か

ら始まったとするものである。その結果、夢窓疎石茶式創始譚の成立の背景に、渡唐天神説話からの影響があった。

### 「施釉方法にみる和物茶碗の造形展開」 金好友子

一六世紀後葉から一七世紀初頭につくられた多くの和物茶碗には、高台周辺に露胎が見受けられる。露胎とは、器表の一部に釉薬が掛からず、胎土が見えている状態およびその部分を指す。

これまで、生産体制や窯業技術の観点から露胎の分析が行われており、露胎は量産化とそれに伴う省力化の一環として出現したものであると位置付けられている。つまり、窯内での器同士の間接的防ぐという、生産の効率化を図るための工夫であると考えられてきた。

本発表では、露胎はこうした機能性だけでなく、茶碗を裝飾す

る要素の一つでもあることを主張した。筆者は瀬戸黒、織部黒、黒織部、志野、奥高麗の露胎を範囲と形状に着目して分析し、それぞれの露胎の傾向を示した。その結果、瀬戸黒、織部黒の露胎は高台脇に広がる不定形が多いのに対し、黒織部は腰下が全面露胎のものが急増するなど、異なる傾向がみられた。また、志野の露胎は五つに大別でき、露胎の範囲や形が多様化し、胎土が見える割合を意図的に調整した様子が窺えた。さらに奥高麗は七割以上が腰まで露胎とし、見込や畳付に目跡がないものも多数存在した。

このような傾向は、器の溶着を防ぐものとしての露胎の在り方から、茶碗を裝飾する要素の一つとしての露胎の在り方へと、その意味が変化したことを示している。すなわち、本来ならば茶碗の粗悪化や質的低下をもたらす露胎は、新たな茶碗を創造する過程で意匠として捉え直され、茶碗に取り入

れるようになったと結論づけた。

(令和二年十月十九日)

## 『三冊名物記』の成立と展開

### 橘 倫子

『三冊名物記』とは、江戸時代中期に編纂された茶道具の名物記で、茶入をはじめ、掛物、香炉、花入、茶碗など、三百数十点の茶道具について、所蔵者や伝来、形状、寸法、付属品（仕覆、挽家、箱）等の情報を彩色図入りで掲載している。その博物学的、実証的内容はまさに「茶道具図鑑」と呼ぶにふさわしい画期的な内容であり、多くの写本が流布し、後に『古今名物類聚』『大正名器鑑』にも引用された。また、器物単体ではなく、牙蓋、仕覆、挽家、箱等の付属品も含めて一つの茶道具として捉える「茶道具鑑賞の視点」も本書の流布を通して定着していったと考えられる。このように、大変重要な研究対象でありながら、まだまだ解明されていない点が多

く、木塚久仁子・矢野環両氏の先行研究によって、その構成や成立時期が一部解明されたに過ぎない。

この度、「茶道資料館開館40周年・今日庵文庫開館50周年記念特別展『三冊名物記』——知られざる江戸の茶道具図鑑——」の展覧会準備の段階で、①『三冊名物記』掲載道具の作品調査、②複数の『三冊名物記』転写本の比較調査を通して新たな発見・考察の機会を得たことから、先行研究を踏まえつつ、『三冊名物記』の成立と展開について再考する。とりわけ、第一巻と第二、三巻の成立時期や編著者の違い、編著に大きく関わったとされる大給松平乗邑（おぎゅうまつだいらのりさと、一六八六〜一七四六）の動向と第二、三巻の記載内容との関連に着目し、各巻の特徴を明らかにする。

## 金沢例会

(平成三十一年三月十日)

「天目碗からみた日中の茶文  
化事情——「天目」の由来と  
インゲン豆——」

### 岩田澄子

黒釉を特徴とする中国由来の天目碗は、中国でも宋代の点茶法（懸濁茶）にふさわしいと考えられた。しかし点茶法は、中国では完全に廃れ黒釉碗の生産が早期に終了する。一方日本では、茶の湯文化へと発展した。

十六世紀中頃に和物茶碗や高麗茶碗が使われ始めると、天目碗は一般の茶会にほとんど登場しなくなるが、人気がなくなつて消えたのではない。中国由来と意識された格の高い作法（台天目、真行草の真）が現在も伝承されており、着物にたとえると「留袖」のような存在になったと言える。

天目碗は、①聞かない（中国の事情）、②見ない（日本の事情）、③言わない（秘伝）の三拍子が揃っ

ていて、謎が多い。しかし、中国と日本で実用された茶道具で、日中茶文化史を包括的に理解する上で格好の教材である。

ところで、碗名を示す「天目」の語は中国にはなく、「天目」の由来は日本僧が天目山から持ち帰ったからと考えられるが、初めて日本僧が天目山に上ったのは元時代で、中峰明本（ちゅうほうほうみんぼん…一二六三〜一三三三）がいたからと考えられる（佐藤豊三・岩田説）。

一方、「インゲン豆」は明代の茶を日本に伝えた隠元隆琦（煎茶道の祖）がその名の由来である。ところが大槻幹郎氏（黄檗文化研究所）のご教示によると、日本黄檗宗の開祖である隠元は、禅宗の法系上、三百年以上前に活躍した中峰を自分の遠祖と考えているという。禅宗史と日中茶文化史を通観すると、宋代と明代の茶の興味深い接点が見えてくる。



## 例会のご案内

### 東京例会

二〇二〇年二月二十九日(土)

午後二時～

会場：五島美術館

「江戸の酒井宗雅」

谷村玲子

「仏教儀礼と茶」

米沢 玲

### 東海例会

二〇二〇年三月二十八日(土)

午後一時半～

会場：浜松市茶室「松韻亭」

「茶の湯における染付」

善田のぶ代

### 近畿例会

二〇二〇年二月二十九日(土)

午後二時(開場：午後一時半)

会場：大阪市立東洋陶磁美術館

地下講堂

「茶の湯と竹工芸」

巖由季子

「煎茶と竹工芸」

宮川智美

\*当日は、特別展「竹工芸名品展」

ニューヨークのアビー・コレク

ションーメトロポリタン美術館

所蔵」開催中です。

\*近畿例会のみの出席者は入館料

不要ですが、特別展の観覧には、

別途観覧券の購入が必要です。

協力：大阪市立東洋陶磁美術館

### 北陸例会

二〇二〇年三月二十八日(土)

午後二時～

会場：鯖江市文化の館

「堀口捨己の中柱論(仮)」

近藤康子

### 金沢例会

二〇二〇年三月八日(日)

午後一時半～

会場：石川県文教会館(〒九二〇

一〇九一八 金沢市尾山町一〇一

五)

「茶の湯と漆芸」

福島修

### 高知例会

二〇二〇年二月二日(日)

午前十時～正午

会場：高知県立文学館 慶雲庵茶

室

「高知支部二〇二〇年度事業計画」

岡倉天心『茶の本』第五章輪読

茶席

茶の湯文化学会の研究成果を实践

する。茶の湯を一般の方々に関し

んでもらうため「床飾り」「道具

立て」はするが、お点前はお客次

第として楽しめる茶席を設ける。

会費 三百円

## お知らせ

### 令和二年度

総会・大会のご案内

令和二年度総会・大会を左記の

日程で計画中です。

詳細は令和二年四月に郵送にて

ご案内いたします。

日程：令和二年五月三十日(土)

見学会(東京国立博物館

茶室)

懇親会

五月三十一日(日)

総会・大会

### 令和二年度大会発表者募集

令和二年度の研究発表者を募集

します。発表を希望される方は、

「大会研究発表用概要書式」(ホー

ムページの募集欄をご覧ください)

を添えて、学会事務局までメー

ルもしくは郵送でご応募下さい。

大会終了後、発表内容をベースと

して論文にまとめ、会誌『茶の湯

文化学』に投稿していただけます。

うな発表をお待ちしております。

開催日程：令和二年五月三十一日

(日)

応募資格：茶の湯文化学会会員で

あること

募集締切：令和二年二月四日(火)

発表時間：研究発表三十分

質疑応答十分

・メールでの応募の場合は、件名を「令和二年度大会発表募集」として下さい。

・応募の際は連絡先のほか、現在の所属先、肩書等もあれば、併せてお知らせ下さい。

・応募多数の場合は、審査の上決まさせていただきます。

・詳しくはホームページをご覧ください。

・その他ご質問等ございましたら、学会事務局までお問い合わせ下さい。

●質問を募集します

前号からお伝えしておりますが、会報一〇〇号発刊を記念して、「質問コーナー（仮称）」の欄を新設することになりました。会員のみなさまから茶に関する学問的な質問を募り、質問内容に近い分野の研究者が、これに紙面上で回答するという企画です。この質疑応

答を通して、会員相互の交流をより密なものにするともに、最新の論点を含む知識を得る場を設けたいというのがおおもな目的です。

質問に際しては、以下の点をご了承下さい。

質問は記名とし、文章は簡潔で分かりやすい表現にして下さい。なお、寄せられた質問、の中から、学会員全体にとって有益と考えられるものを選別し掲載いたしますので、掲載されない質問があることもご了解下さい。したがって毎号このコーナーが掲載されるとは限らず、質疑応答の両文が調った段階で掲載するということとなります。

どうぞおふるってご質問をお寄せ下さい。

●新刊案内

『庭と建築の煎茶文化 近代数寄空間をよみとく』  
尼崎博正・麓和善・矢ヶ崎善太郎  
編著

思文閣出版

定価五、五〇〇円＋税

これまで茶の湯の視座からのみ語られてきた近代数寄空間を煎茶的要素からよみとくとき、新たな解釈を提示する。

『尾張の茶 歴史・茶人・茶室・道具を知る』  
神谷宗儀著

淡交社

定価二、五〇〇円＋税

尾張の茶道史・ゆかりの茶人と茶室／茶道具・茶の美術館・美術商・菓子舗・料亭・大正昭和初期の茶会と動向など。

『千利休―「天下二」の茶人』

田中仙堂著

宮帯出版社

定価三、九〇〇円＋税

同時代史料を厳選し、理想化される以前の等身大の利休の実像に迫る。

『風流紳士録 籠師が見た昭和の粹人たち』

池田瓢阿著

淡交社

定価一、五〇〇円

大茶人・益田鈍翁に薫陶を受けたわび籠花入づくりの名手が交遊した数寄者や美術商たちとの回想録。

『仁清 金と銀』

西田宏子・岡佳子監修 M O A 美術館編集

淡交社

定価一、七〇〇円＋税

御室窯における作風の展開をたどりつつ、多岐にわたる作例の中から金銀彩を使用した色絵陶器を中心に紹介。

●年会費未納の方は、至急払込み

下さいませよう、よろしくお願  
いたします。